

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】(中学校用)

都道府県名	京都府
-------	-----

学校の概要(平成15年4月現在)

学校名	和知町立和知中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	1	1	1	1	4	10
生徒数	30	31	39	2	102	

研究の概要

1. 研究主題

自らが学び、考え、主体的に学習に取り組める生徒を育てる指導方法
 =「確かな学力」を身につけ、生徒が意欲的に取り組むための学習指導方法を
 目指して=

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・数学
 生徒の理解の状況に差が出やすい教科であることと、研究の成果を検証しやすい教科だと考えたため。
 また、各学年が、1学級という小規模校であるので、様々な取組をすべての学年で実施し、比較検討をするため。

(2) 年次ごとの計画

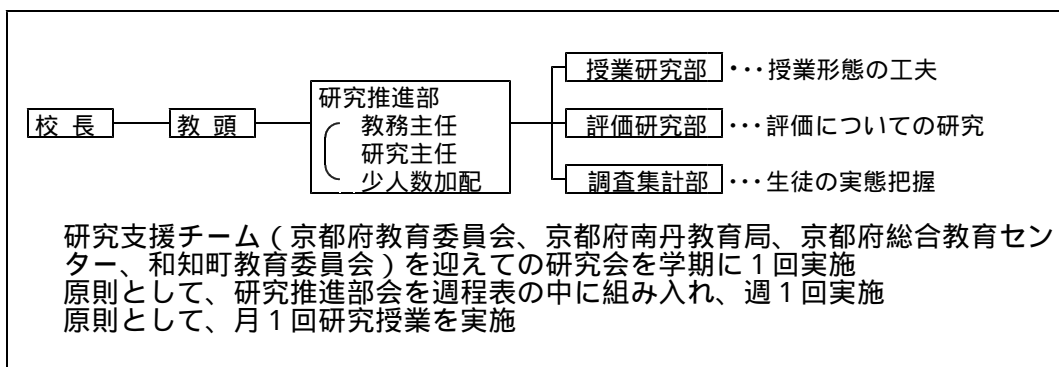
平成14年度	<p>テーマ 少人数授業における様々な授業形態の実践と自己を含めた評価方法の研究 研究の見通し(仮説) ・様々な授業形態を実践することにより、学力向上が期待できる指導方法を明らかにすることが出来るのではないか ・生徒自身が授業での自己評価を適切に行うことにより、自らの学習状況を把握でき、主体的に学習に取り組めることに繋がっていくのではないか</p> <p>研究内容・方法 ・様々な授業形態の実践 『単純分割少人数授業』『自由進度学習』『課題選択制授業』 『習熟度別課題選択制授業』『習熟度別授業』等・・・ ・单元ごとに、学習内容と評価規準、及び評価基準をまとめた『单元指導計画及び評価規準表』の作成 ・毎時間授業中の様子を記録する『チェックカード』の作成 ・生徒が毎時間の授業を自己評価する『がんばるぞカード(自己点検表)』の作成</p>
--------	--

平成15年度	<p>テーマ 習熟度別授業を中心とした効果的な指導方法の工夫・改善と、そのための効果的な教材・教具の開発 研究の見通し ・生徒自らが選択した習熟度別授業を実施することにより、個々の生徒の学力実態に応じた学習指導が出来、確かな学力が身に付くのではないか。 ・様々な指導方法に適した教材・教具を開発することにより、生徒自らが興味を持ち、主体的に学習に取り組めることが出来るのではないか。</p>
--------	---

	<p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元全体を通して、習熟度別に分けたり、単元のまとめだけ、あるいは導入だけを習熟度別に分けるなど、また、機械的に1クラスを2つに分割した後で、習熟度に応じた小グループに分けるなど、習熟度別授業の効果的な指導方法の実践・研究 ・基礎コース、発展コースにふさわしい、また、生徒が興味関心を持ち、意欲的に学習に取り組めるワークシートの作成、特に、発展的な学習に用いる深化学習のワークシートの作成
--	--

平成 16 年度	<p>テーマ 研究成果の波及</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1, 2年次の研究成果をもとに他教科での研究に広げていくことや他のフロンティアスクールとの連携を進めていくことにより、研究改善が進められ、学力向上が図られるのではないかと。 <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果を学校ホームページ等で公開、発信していく。
----------------	--

(3) 研究推進体制

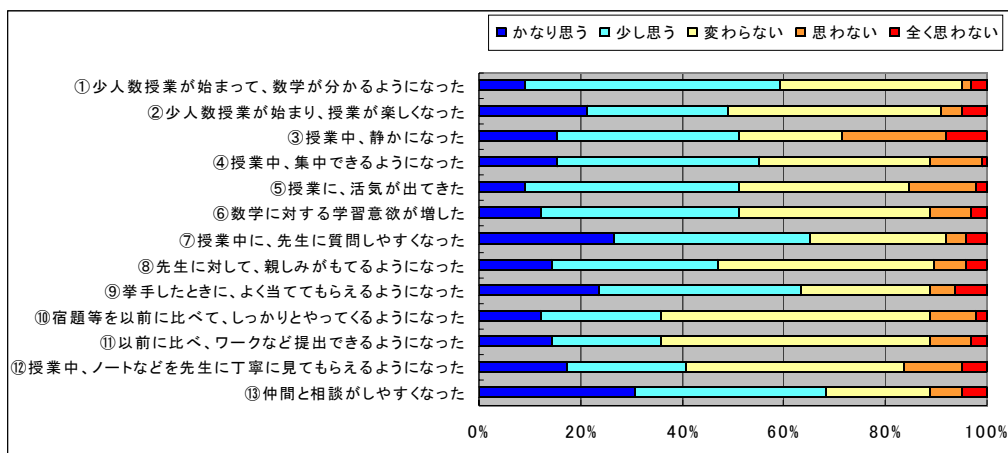


平成15年度の研究成果及び今後の課題
1. 研究成果

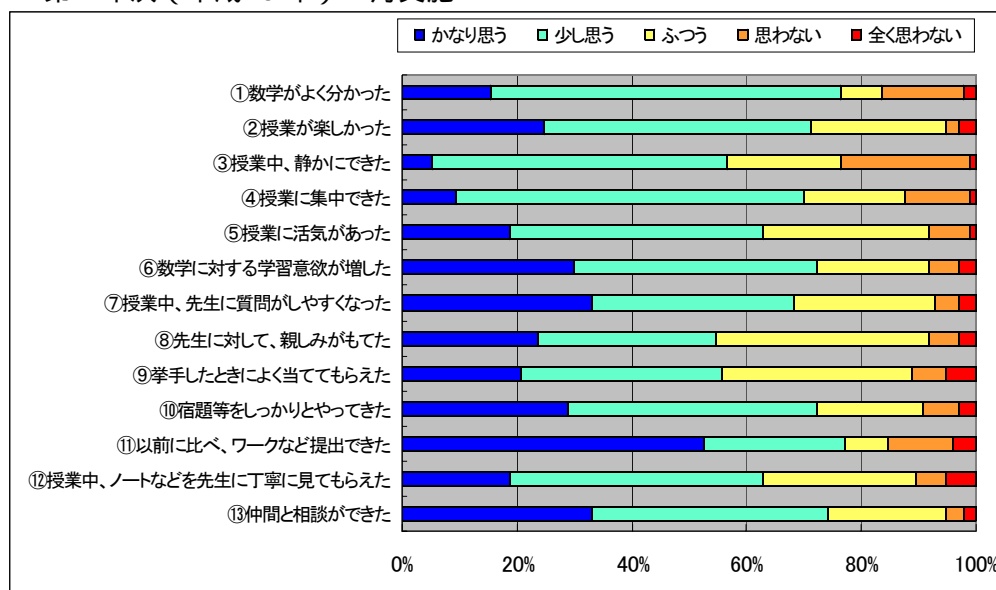
生徒の変容

1 生徒のアンケート結果から

(1) 少人数授業についての意識の変容
第1年次(平成14年)7月実施



第2年次(平成15年)7月実施



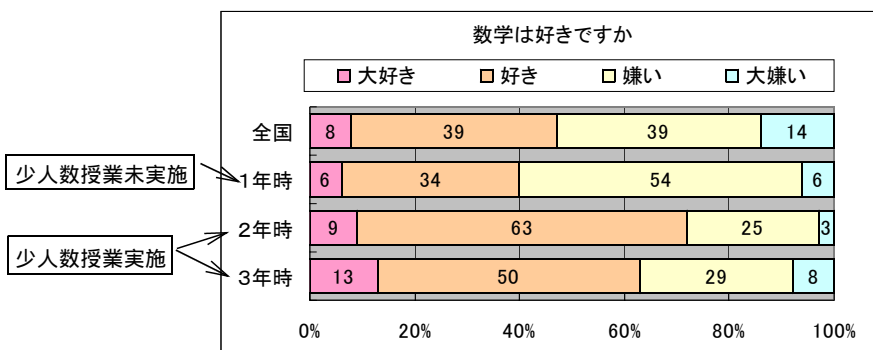
上のアンケートは少人数授業を始めた1年目(平成14年7月)と2年目(平成15年7月)に実施したものである。1年目と2年目を比較すると、「数学がよく分かった」「数学の授業が楽しかった」など、ほとんどの項目で【かなり思う】と【少し思う】を合わせた割合が増加している。このことから、少人数授業が一時的な目新しさだけにとどまらず、数学への学習意欲が増し、宿題への取組やワークなどの提出率も上がっていることから考えると、生徒の間に浸透し、肯定的に受け入れられていることがうかがえる。

(2) 数学に対する意識の変容

和知中学校数学科では研究指定を受ける前から、平成11年度より『数学』についての意識アンケートを実施しその結果を授業改善に生かしてきている。次の図は、現在の3年生の結果を示したものであり、少人数授業を実施していない1

年生時と少人数授業を実施した2、3年生時を比較したものである。ここで、全国とあるのは国際教育到達度評価学会調査の平成11年度の結果である。

この図から、1年生時には数学が「嫌い」と答えた生徒が全国平均よりも多い60%に上ったが、2、3年生時には、逆に「好き」と答えた生徒が60%以上になり、ここでも少人数授業の成果が現れているものと思われる。



(3) 習熟度別授業についての生徒の変容

『コース別学習をしてよかったか』の質問に「大変よかった」「よかった」を合わせた割合

	平成14年2学期	平成14年度3学期	平成15年度1学期	平成15年度2学期
3年	62.9%	78.8%	84.0%	95.5%
2年	58.1%	調査なし	97.0%	97.0%
1年	-	-	86.7%	100.0%

多くの生徒が習熟度別学習をして、「よかった」と答えており、また習熟度別授業を何度も経験している中学2、3年生は習熟度別授業を繰り返して行うことに「よかった」と答えている生徒が増加している。

「よかった」と答えた生徒の理由

- ・当てられる回数が増えた。
- ・一人一人見てもらえる。
- ・分かりやすい。
- ・発言しやすい。
- ・静かにできる。
- ・やる気が出る。

2 2年生学力診断テストの結果（平成15年11月5日実施）

		設定正答率	和知中学校正答率
	総合	65.0	73.7
領域別	数と式	67.9	77.5
	図形	52.0	51.5
	数量関係	69.2	83.3
観点別	見方・考え方	52.5	61.7
	表現・処理	70.0	80.7
	知識・理解	66.0	68.5

昨年度、実施した2年生学力診断テストの結果で見ると、『図形』の領域以外では、設定正答率を上回る結果となり、和知中学校全体としてはある程度の学力が定着しているものと思われる。『図形』領域が設定正答率を下回った原因としては、1年時の数学の授業で、『数と式』の領域に重点を置いて指導したこと、このテストを実施したのが、11月であり2年生の『図形』の領域の指導に取り組み始めたばかりであったこと等が考えられる。また、個別に見ていくと、定着率に大きな個人差があり、今後は学力に課題のある生徒をいかに指導し、伸ばしていくかという課題がある。

3 指導等、指導方法の研究開発についての成果

前述のアンケート結果にもあるように、8割以上の生徒が習熟度別授業を「よかった」と答える結果となった。習熟度別授業を含む少人数授業を実施したことが、「学習意欲が増した」「数学がよく分かった」と答える生徒の増加につながっているものと思われる。具体的には、「平方根」の単元で実践したが、人数を少なくし、その集団に適した指導方法を工夫・追究していくことで、生徒の努力の跡が期末テストの点や1学期の成績として目に見える形となって現れた。そのことが生徒の学習意欲の向上につながっている。

また、評価が目標評価に変更されたことも生徒にとっては、大きな意味を持ち、自分の努力に応じて数字として結果が表れることとなり、それが生徒の意欲につながり、少人数授業が上手く展開できた原因の1つであると考えられる。

4 教材・教具の開発についての成果

個に応じた指導のための教材作成が少しずつではあるができた。特に、第1学年の「課題別プリント学習」では、定期テストで未定着な問題をその時点で効率よく復習できるプリントが作成できた。また、発展的な学習のための教材も数種類作成することができた。

5 評価方法の研究についての成果

各単元ごとに「十分満足できる状況」A規準と「努力を要すると判断された生徒への具体的な対応・手立て」を含んだ評価規準を作成することができた。自己点検カードについては、授業の進み具合により、授業の最後に自己点検を行う時間が確保できない場合もあるが、ほとんどの生徒が真面目に自己点検をする習慣ができた。評価については、目標評価になり当初は戸惑いもあったが、評価規準表、チェックカード、自己点検カード等から総合的に判断し、ある程度自信を持って評価できるようになった。また、教師が2人になったことで、生徒を違う視点から評価できるようになった。

2. 今後の課題

1 指導等、指導方法の研究開発についての課題

第1年次に行った中間発表で、学習単元ごとにより効果的で「確かな学力」が身に付いていくと思われる指導法、指導形態を研究していきたいと考えていたが本校は、各学年が1学級で、学級ごとに比較検討することができず、単元内容にふさわしい学習形態の研究・考察は十分にはできなかった。しかしながら、指導方法、指導形態を工夫していけばAコース（基礎コース）の生徒であっても十分に理解できる可能性があることが実証できた。

2 教材・教具の開発についての課題

和知中学校独自の教材開発をすることはなかなか難しいが、学習集団に適した教材を用いて指導した場合は生徒も、教師もその授業にかなりの達成感、満足感が得られることも分かった。今後も補充的な内容・発展的な内容とともに生徒の学習集団に適合した教材作りを続けていく必要がある。

3 評価方法の研究についての課題

自己点検カードやチェックカードでつかんだ生徒の未定着な部分を授業の中でどのように回復していくのか、つまり指導と評価の一体化をさらに研究していく必要がある。また、4観点の中の「数学への関心・意欲・態度」についてはより客観的に、適切に評価していくための方法等を工夫していかなければならない。

4 次年度の研究の方向性

- (1) 単元内容にふさわしい指導法、指導形態の工夫、研究
- (2) 「個に応じた」指導のために、補充的並びに発展的な学習に適した教材開発
- (3) 学習した内容をその時間、その単元だけでなく、かなり長い時間に渡り持続・定着させていく方法、工夫
- (4) 少人数授業に分割したグループの中にも、多様な生徒がいることを踏まえ、さらにきめ細かい個に応じた指導の追究
- (5) 個に応じた指導と目標評価の研究を深め、本研究で明らかになった成果を全教師に波及していくための研修会の実施

学力把握のための学校としての取組

- 1 学習アンケートの実施
学習指導部が中心となり、各学期に1回、家庭での学習状況を把握するために学習時間等や分からない問題が出てきた場合にどう処理しているか等を聞くアンケートを実施している。その結果を集計し、学級指導や三者懇談の資料として活用している。
- 2 少人数授業についてのアンケートの実施
研究推進部が中心となり、数学の少人数授業についてのアンケートを学期に1回実施している。内容は、「数学がよく分かったか」「数学が楽しかったか」「意欲的に数学に取り組めたか」「コース別学習についてどう思うか」等で、その結果をもとにしながら、指導方法の工夫改善に繋げている。
- 3 CRT（観点別到達度学力検査）の実施
生徒の学習状況を客観的にとらえるために、平成13年度より、1月に5教科で実施している。結果は学級担任より、二者懇談をしながら返却し、学習指導を行っている。
- 4 2年生学力診断テストの実施
平成15年度より、京都府のすべての2年生で11月に国語、数学、英語の3教科で実施している。結果は担任と二者懇談をしながら、3学期に返却する。時期として2年生の進路学習と重なり、学習を見直し、自己の課題を知って目標を立てていく資料とする。

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- 1 平成14・15年度 京都府教育委員会指定京都夢・未来校の研究発表会
内容：公開授業『2年：一次関数（一次関数の利用）』
研究発表
指導講評 等
日時：平成15年10月24日（金）
会場：和知町立和知中学校
- 2 船井郡中学校教育研究会数学部会での授業研究
内容：公開授業『3年：課題学習（生活の中の数学）』
1年間のまとめの部会 等
日時：平成16年1月30日（金）
場所：和知中学校
- 3 平成14・15年度 京都府教育委員会指定京都夢・未来校の研究成果をまとめた研究紀要の作成および指導案集や教材プリント等をまとめたCDを作成し、配布する。
- 4 平成14・15・16年度文部科学省指定学力向上フロンティアスクールを契機として、和知中学校のホームページを更新し、研究の成果等を発信し続ける。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無